

能 熊 坂

天領佐渡両津薪能

令和五年十月二十一日（土） 開演 十九時三十分

佐渡市原黒・椎崎諏訪神社能舞台

※ 雨天の場合は、会場を金井能楽堂に変更することがあります

主催 天領佐渡両津薪能実行委員会

アースセレブレーション実行委員会

佐渡市

「佐渡宝生」

能楽五流のひとつ、宝生流は、加賀宝生をはじめ、南部宝生、会津宝生、佐渡宝生など江戸時代からの流れが根強く今日に受け継がれています。

慶長九年(1604)、佐渡奉行となった大久保長安が佐渡に猿楽師を同行したことから佐渡における能楽が始まりました。常太夫、杳太夫を中心に、おそらく観世座が生まれ、相川の春日社で神事能が催され、その後次第に国中から島内各地に広まっていきました。両太夫の絶家後は潟上の本間太夫がこれに代わって佐渡能楽の中心になっていきます。

本間家初代となる本間秀信は、江戸の宝生太夫の門を叩き、その教えを受けて寛永十八年(1642)に佐渡に帰ります。慶安四年(1651)、佐渡奉行から正式に宝生の能太夫を拝命し、さらに翌年には宝生宗家より能太夫の世襲を認められます。ここに「佐渡宝生」の礎が築かれることとなりました。本間太夫は代々宝生宗家の教えを受け、佐渡に正統の宝生流を伝えてきました。

加賀には「謡が天から降ってくる」という言葉がありその盛んな様を伝えています。一方佐渡にはこんな言葉もあります。「舞い倒す」。能舞が高じて身上を潰すというものですが、それは修行を積んで正統な宝生の能を舞おうとする「佐渡宝生」の本質を内包する言葉であると言えます。

能解説

天領佐渡両津薪能実行委員会

齋藤 達也

火入れ式

後シテ(熊坂長範)
前シテ(僧)

金井 雄資

熊

坂

ワキ(旅僧) 倉品 康夫

アイ(所の者)橋本 賢次

大鼓 石川 久仁於 太鼓 葛西 直樹
小鼓 幸 信吾 笛 本間佐登瑠

後見 金井 賢郎
齋藤美千枝

永田 治人

地謡 齋藤 貴史 曾我 長治
斎藤 隆 石山 勝秋
笹川 通博 神主 式二
佐々木雅文 齋藤 達也
石田 信康 土屋 晴夫

附 祝 言

終演予定 二十時五十分頃

熊坂(くまさか) 能解説

美濃国(岐阜県)赤坂の宿まで来た東国修行をこころぎす都の僧は、別の僧に呼び止められ、今日はある人の命日なので弔いをしてほしいと求められる。誰の命日なのかも明かさなまま庵室に案内されるが、そこには仏の絵像も木像もなく、大長刀や鉄の棒などのものしい兵具が、壁にびっしりと立てかけてある。都の僧は不審に思い尋ねてみると、このあたりには山賊や夜盗も多く、いざというときには駆つけて追ひ払い、人々から頼もしいと言われ喜んでゐる、と出家らしからぬことを言う。さらに愛染明王や多聞天の持つ武器になぞらえて、わが振る舞いや殺生を仏の方便にたとえたりしているうちに、やがて旅人に休むようにとすすめ、自分も寢室に入るように見えたが、今までいたはずの庵室は草むらとなり、一人とり残された都の僧は、もの寂しい松蔭に夜を明かそうとしているのであった。〔中入り〕

秋風吹く夜ふけ、僧が経を読み亡き跡を吊っていると、雲を吹き流し烈しく夜風が立ち騒いで、音に聞く大盗賊、熊坂長範の霊が、大長刀を持ち頭巾をかぶった生前の姿で僧の前に現れ、語り舞いはじめる。奥州へ下る金売り吉次の財宝を狙い夜襲を仕かけたものの、一行の中にいた牛若丸のために一味は撃退され、牛若丸との大立ち回りとなった頭目の長範も斬られて、ついにここで命を落としてしまった。どうか成仏できるよう助けてほしいと旅の僧に告げ、夜明けとともに松の蔭へと消え失せていった。